

[研究論文]

フィールドワーク映像教材の試作 —久留米市合川町フィールドワーク— The prototype of fieldwork visual materials. Case of Aikawa district in Kurume city.

上野 由希子[†]
Yukiko Ueno[†]

[†]久留米大学 比較文化研究科 後期博士課程

[†]Department of Comparative Studies of International Culture and Societies Kurume University. Doctoral program.

1. はじめに

フィールドワーク、すなわち野外調査は、地理学に親しむ方法として地理学教育に多く取り入れられている。斎藤（1988）は野外観察について「本や地図には表現されていなかった事実を発見してこそ野外調査の意義が生じてくる」と述べているように、現地でしか経験できない事が多くある。現地を訪れ肌で感じることは、教室で講義を聴くよりも直感で伝わり、学生にとって印象に残りやすいであろう。井出ほか（2009）は、フィールドワークが生徒に及ぼす影響を明らかにする研究を行った。中学生に対して同一の内容の授業を行い、一方はフィールドワークを実施、一方は教室で資料をもとに授業を行った。その結果フィールドワークを行ったクラスでは、地域を見る視点の変化や地理的見方、考え方の育成などさらなる学習意欲が喚起され、高い学習効果が生じていることが明らかとなった。ほかにも地理教育の分野ではフィールドワークに関する研究が進み、フィールドワークが学習者の地理学的視点を育成するために効果的であることがわかっている。

久留米大学情報社会学科で実施されている「総合情報社会論」という授業は、各分野の教員が数回ずつ担当するオムニバス形式の授業である。中でも地理学分野の授業では大学周辺のフィールドワークを実施している。具体的な内容については堂前（2007）、堂前ほか（2011）の研究報告に詳しい。

久留米大学文学部情報社会学科が目指す学生像は、「情報を収集し、わかりやすく加工して、広く発信する」ことができる人物である。つまり、総合的に情報を取り扱うことができる人材を育てることが学科の目標としてかけがえられてある。総合情報社会論のフィールドワークでは、その基本となる観察する力をつける練習として身近な地域を歩き、そこがどのような地域であるかを地域に隠されたヒントを手がかりに考え、仲間と共に学ぶ体験をする。地域の見方や考え方を学び、身近な地域について理解を深めることを通して、地理学的な視点で地域を見つめる。地理学的なもの見方の楽しさを知り、学習意欲を高めることを目的としている。また、班でわかれて行動し、学生同士で協力して答えを導き出せるように問題を設定しているため、入学間もない学生が仲良くなるきっかけにもなっており、学生にも好評の授業となっている。

しかしながら問題も発生している。例えば、道に迷って観察すべき場所を通過していない班が例年発生していること、観察ポイントに配置する上級生の人員確保が難しいこと、雨天中止

時のフィールドワーク代替え授業の経験が無いことなどである。篠倉 (2012) は、学生が道に迷うことを解決するツールとして、Web ページの制作を行った。携帯電話から Web ページにアクセスし、地図中の番号と対応させた場所の写真を表示させ、曲がるべき場所を教えるという補助的なツールとなっている。Web ページを使用させた検証では、迷う学生が減り、一定の効果があつたものと思われる。しかし、チェックポイント以外での迷いが発生した時に対応できないこと、自主的な読図とのバランスに問題があることを指摘した。

本稿では、総合情報社会論のフィールドワークにおける問題点のひとつである、雨天中止となった時のフィールドワークの代替え授業に着目した。幸いにもこれまで一度も中止となっていないため、雨天時の授業について取り扱った経験がない。雨天時にはパワーポイントで写真を用いて説明を行うことを想定しているが、よりフィールドワークの雰囲気を楽しむためのフィールドワーク教材を制作する必要性を感じた。そこで写真よりも情報量の多い映像¹ (動画メディア) を使用することによって、学生の理解がより進むのではないかと考えた。

映像教材を制作するにあたり、学生がどのような点に着目しているのかを把握することで、より学生の興味をひくものが制作できるのではないかと考えた。本稿では、あえて全く説明の無い映像を試作し、大学生の空間認知に関する調査を実施した。映像を見てどのようなものに注目したかを自由記述式で記入してもらいアンケート形式で調査を行った。アンケートの自由記述からキーワードを抽出し、学生がどのようなところに注目するのかを分析した。

本稿の目的は、悪天候時の代替え授業で使用するフィールドワーク映像教材を制作するために、学生が地域に対してどのような視点を持っているのかを明らかにすることである。そして学生が地理学的視点を持つきっかけとなる映像教材について考察することである。

2. フィールドワークの概要と映像の構成

2.1 フィールドワークの概要

総合情報社会論で行われているフィールドワークの概要を簡単に説明する。対象地域は久留米市合川町 (以下、合川とする) である。合川は筑後川の河岸段丘面に位置している。大学からみると低い土地である。事前授業では、久留米の地形図を見ながら筑後川と大学場所を把握し、合川との位置関係を確認させる作業を行う。フィールドワーク当日は、観察するべき場所と問題が書かれた用紙と地図を配布し、それを見ながら5~7人の班にわかれてフィールドワークを行う。

¹ 映像とは、写真や動画などのことを言うが、本稿での「映像」は、動画メディアのことを指す。

帰学後にフィールドワークの中で解いた問題の答え合わせをしながら地域の特徴について解説を行う。まず導入部分でフィールドワークについての概要を説明し、具体的な観察ポイントを挙げ合川の特徴を導き出す。盛土やあげ舟からわかることは、合川は筑後川の氾濫地域で洪水が頻発していた地域であるということ。かつて合川には漬物工場や晒工場が立地していたことや水神碑の記述²からわかるのは、豊富な湧き水を農業用水や工業用水として利用していたこと。水への恐れや感謝の気持ちが水天宮や水神などの水信仰に表れている。洪水・利水・水信仰という三つのキーワードが存在し、そこから導き出される合川の特徴は、水と大きく関わりのある地域であると言える。扇状地と土地利用の説明では、久留米大学の立地を例に解説を行い、自然的な要素と人文的な要素を横断的にとらえるという、地理学的な視点を持つきっかけとなることをねらいとしている。

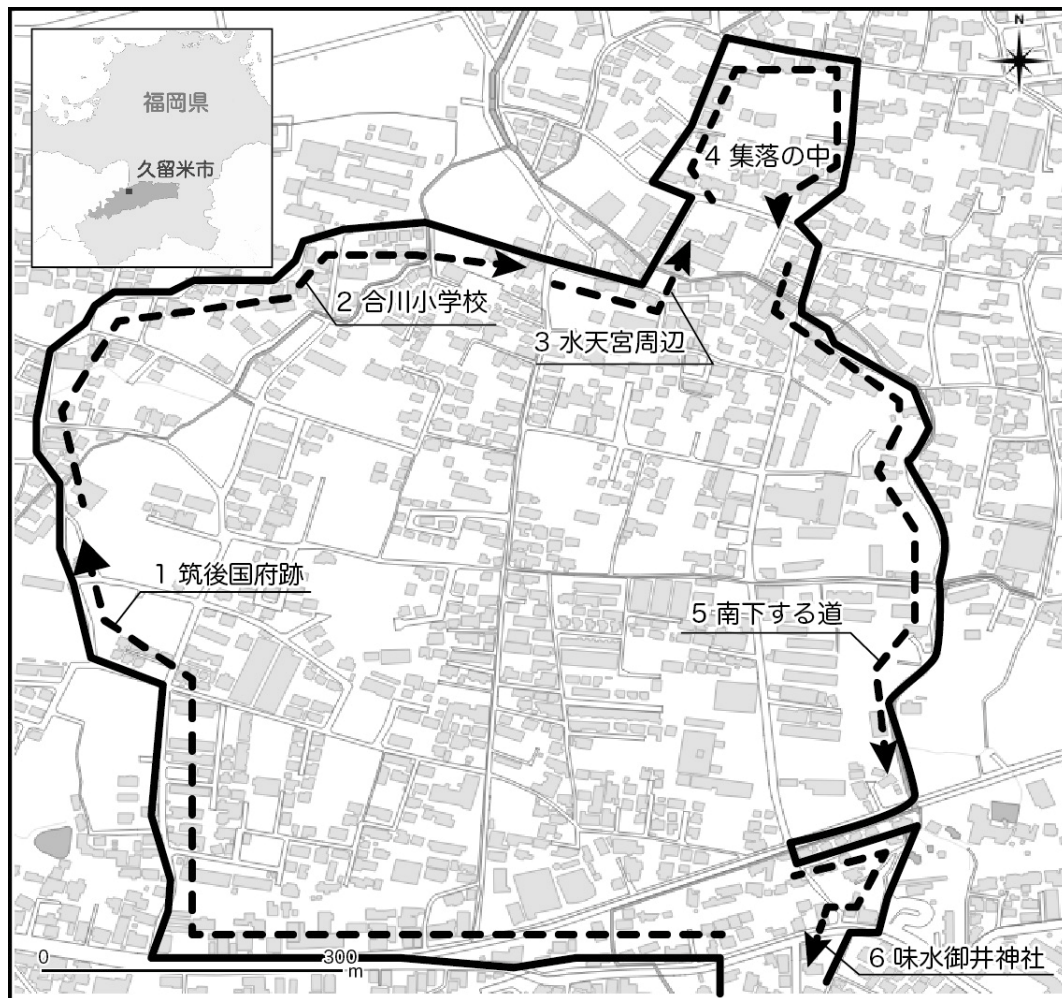


図 1 久留米市合川町の位置とフィールドワークのルート (筆者作成)

² 水神碑「是ヨリ下流ニ向ヒ南側ニ湧水地多ク豊ナル水ヲ貯附近ノ水田ヲ潤シテキタル事ヲ遺ス」と刻まれている。

2.2 映像の構成

調査に使用したフィールドワークの映像の構成は、実際にフィールドワークを実施した場合のルートに沿って順番に観察していくように構成した。はじめに調査の方法と注意点のテロップを出し、そこで一旦停止して口頭で説明をできるようにした。各観察ポイントの前には大きくタイトルを表示し、ポイントごとに区切りをはっきりつけるために終わりは白い画面にフェードしていくようにした。ポイントの番号とタイトルは、映像の右上に小さく表示させて、今どこのポイントの映像を観察しているのかをわかるようにした。観察ポイントが終わる間際には「もうすぐ終わりです」というテロップを表示し、終わりがわかるように工夫した（図2）。

観察ポイントは6ヶ所設定した。6ヶ所に区切った理由は、アンケートがすべて自由記述であるためこれ以上は負担が大きいと考えたためである。観察ポイント1ヶ所につき約2分前後の映像にまとめており、短時間で集中して観察できるようにした。

3. 撮影と編集

3.1 撮影者の主観

映像をつくるにあたってカメラによる映像の撮影を行うが、この時に気を付けなければならない点がある。普段何気なく見ているものは見ている人にとって興味のあるものであり、映像として撮影した時に撮影者の主観が大いに影響した映像となることである。

| 映像キャプチャ | |
|---------------|--|
| タイトル |  |
| 右上にキャプション |  |
| 手持ちカメラ映像 |  |
| 終わり予告テロップ |  |
| 終了時に whiteout |  |

図 2 映像の工夫点

フィールドワークでは、観察者が各々の観点で地域を観察することで、観察者自身が疑問を持ち様々な発見をすることが重要なことである。その状況を再現したいならば、映像はできるだけ客観的に撮影しなければならないことになる。「情報の取得・加工・媒介者の積極的な取舍選択、類型化、誇張、脚色は不可避」と平野（2008）が述べているように、写真や動画などの映像とは、ある場面を切り取って表現するものである。その性格上、客観的に撮影・編集するということが不可能である。したがって、映像によるフィールドワークは実際のフィールドワークとは性格の異なるものとして認識しておく必要がある。しかし、まとまった数で同じ内容を伝える事前学習の講義などではむしろ映像によるフィールドワークの方が適している。限られた時間の中で地理学的な視点を理解するためには、要点をしぼり込んだある程度主観的な映像のほうが効率的であると考えることができる。

3.2 撮影機材と編集ソフト

今回撮影に使用した機材は、デジタル一眼レフと広角デジタルビデオカメラをシーンによって使い分けた（表1）。一眼レフを持って、徒歩でフィールドワークのコースをめぐる、ポイントとなる場所で動画と静止画の撮影を行った。また全体を通しての流れとして、ヘルメットにGoProを装着し、バイクでフィールドワークコースの撮影を行った。使用したソフトは、それぞれAdobe社の画像・動画編集ソフトを使用した。映画の技法で主観映像³というものがある。主人公の目線のカメラで物語が進行する映像で、臨場感があるため感情移入しやすい。ホラー映画やドキュメンタリー映画などで用いられることが多い。この手法を用いて、自分で歩いている感覚に近づけるために広角カメラで全体の流れを撮影し、細かい風景は手持ちカメラで歩きながら撮影を行った。そしてそれぞれ要点を絞った映像を組み合わせることで編集した。

表1 使用機材と編集ソフト

| |
|------------------------------------|
| <撮影に使用した機材> |
| ・デジタル一眼レフ (Canon kiss x7,18-300mm) |
| ・広角デジタルビデオカメラ (GoPro HERO4) |
| <使用ソフト> |
| ・Premiere Pro CS6 |
| ・Photoshop CS6 |
| ・illustrator CS6 |

³ POV方式ともいわれており Point of view shot の略である。

4. アンケート調査の実施と分析

4.1 アンケート調査の実施方法とその内容

本稿では、地誌学Ⅱの受講生である学生にアンケート調査を実施し、55名の回答を得た。映像を見せる前に「今から見せる映像に出てくる地域がどのような場所かを考えながら観察すること」ということだけ伝えた。映像を学生に見せた後、どのようなものに注目したかを自由記述式でアンケート調査を行った。アンケートの自由記述からキーワードを抽出し、学生が地域に対してどのようなところに注目するのかを分析した。アンケートの内容は、映像を見て気がついたこと、特に印象に残ったポイント、調査の感想の3つである。

4.2 アンケート分析

それぞれの観察ポイントごとにアンケートの結果を分析した。キーワードを書き出し、5つのグループにキーワードを分類した(表2)。観察ポイントごとのキーワードの割合は図3のようになった。どの分類にも当てはまらないものはその他に分類し個別に考察を行った。観察ポイントごとに実際のアンケートに記入されていた語を用いながら分析を行う。

表2 キーワード分類表と具体例(アンケートにより筆者作成)

| キーワードの分類 | キーワードの具体例 |
|------------|------------------------------------|
| 交通に関する語 | 道狭い, 分岐, 信号ない, カーブ, 入り組んだ道, くねくね… |
| 農地に関する語 | 田んぼ, 農田, 畑, 田畑, 温室育苗, 作物育てやすい |
| 文化景観に関する語 | 神社, 歴史を感じる, 古い, 鳥居, 昔の名残, 落ち着く… |
| 建物に関する語 | 住宅地, アパート, マンション, 一軒家, 家と家の間が近い… |
| 自然・地形に関する語 | 川, 池, 魚, 木がある, 自然豊か, 緑多い, 坂, 低い土地… |

4.2.1 筑後国府跡の記述(キーワード数: 124語)

このポイントで最も多かったのは交通に関する語で、回答数は33語(27%)だった。撮影した場所は道路沿いであったことが大きく関係していると考えられるが、このような調査に慣れていないため、身近な存在である道路について回答したものと思われる。筑後国府跡として保存してある場所を「空き地」「開けた場所」「荒地」という表現をしている回答数が21語(17%)と多く見られた。このことから文化財の保存に対する知識に欠けていると考えられる。「城跡」という表現も見られ、そもそも国府とは何かということを理解していない可能性がある。これまでに行ってきた解説で、国府の概要と筑後川の河岸段丘に位置していることの説明を行っていたが、文化財の保護についても触れ、ただの空き地ではないと一言添えておいた方が良く考えられる。「田んぼがある」という農地に関する語も21語(16%)あったが、もしかしたら国府跡のことを指している回答もあるかもしれない。しかし実際に田んぼが映像に映っているので、どちらのことなのかを明らかにすることは困難である。

4.2.2 合川小学校の記述（キーワード数：120 語）

タイトルに小学校と入っていたためか、小学校に関連する語が 20 語（17%）あった。それ以上に交通に関する語が 60 語（50%）と半数を占めており、道路や信号などに高い関心があることがわかった。「道が狭い」ということと「通学路」を結びつけ、「危険である」と考えた学生が 5 名いた。国府跡で 16%見られた「田んぼ」などの農地に関する語が極端に減り、2 語のみであった。そのうち 1 名の記述は「田が少なく道路沿いに密集して建物が建っている」という詳しい描写の中に「田んぼ」という語が用いられていた。

4.2.3 水天宮の記述（キーワード数：97 語）

最も多かったのは自然・地形に関する語で、50 語（52%）を占めている。特に水に関する語は全体の 32 語（30%）であった。文化景観に関する語が多くなり、特に神社に関する語が 16 語（16%）となった。また、この観察ポイントの反応の特徴として、今まで近くを通ったことがあるが水天宮があることを知らなかった、という発見や驚きの記述をした学生が 6 名いたことである。住宅地の中に鯉がたくさんいる池があることに驚いたようだ。交通に関する語が 11 語（11%）に減少した。この時点で「水と深い関係がありそうな町」という記述をした学生が 1 名みられた。

4.2.4 集落の中の記述（キーワード数：110 語）

ここではまた交通に関する語が 45 語（41%）で最も多かった。中でも「道が狭い」という語は 30 語あり、全体の 27%を占めていた。映像に軽自動車と離合するシーンが映っており、車同士では離合できないほど狭い道であることがわかる。おそらくこのシーンの印象が強かったと思われる。次に多かったのが建物に関する語で 31 語（28%）である。中でも建物と建物の距離が近く、密集していることに関心が集まったようである。そして文化景観に関する語では「水神をまつるほこらがあるので、近くに川があるのではと思う」という記述があり、地域を観察する力が垣間見えた。他には「なにも特徴がない、普通の所だと思った」という記述が見られたが、この学生の身近にある風景と類似していたからではないかと考察した。このことから、自分に身近な地域と他の地域を比較し相違点や類似点を考えることで、地域の位置付けができ、より深く知ることができるという地理学的な視点について言及しておくべきである。

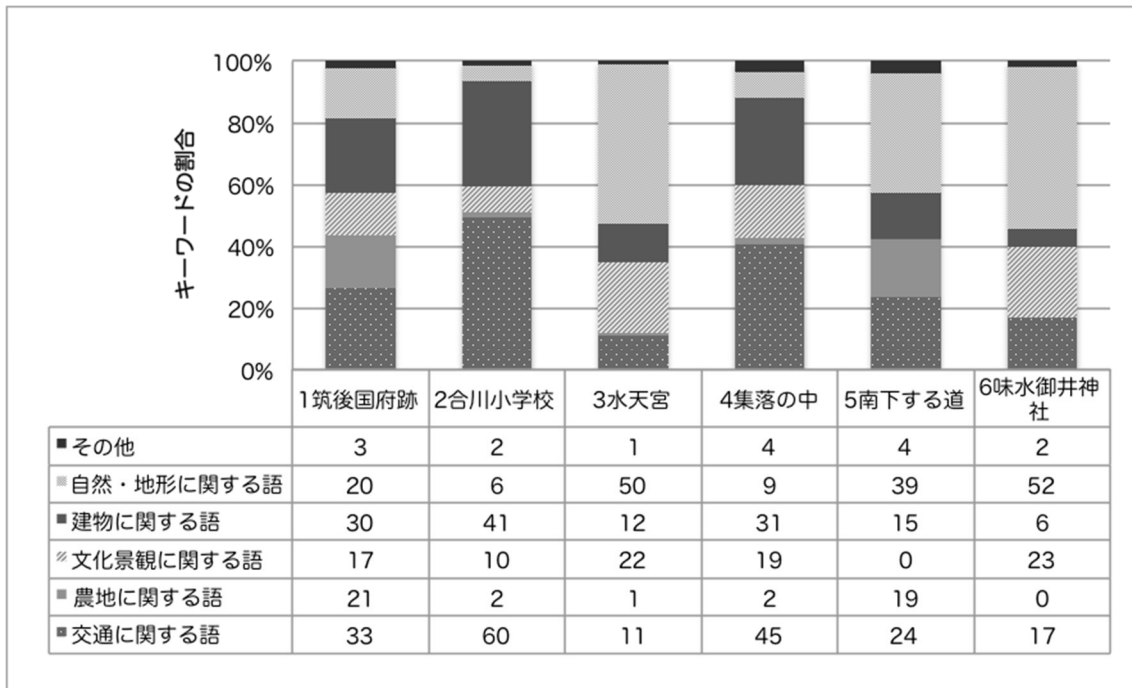


図 3 観察ポイント別キーワード分類の割合（アンケートにより筆者作成）

4.2.5 南下する道の記述（キーワード数：101語）

最も多かったのは自然・地形に関する語で39語（39%）、そのうち20語が「川」だった。ここでも交通に関する語が多く見られ24語（24%）を占めていた。図4によるとこの観察ポイントの特徴は、比較した表現が多いことである。これまで映像でみてきた集落と比較してどう変化したかを回答している学生が7名いた。南下するに従って建物数が減少したこと、新しい家が増加したことに気がついた学生が見られた。「田が住宅になった」と記述した学生は、農地が宅地と化している地域であるということに映像を見て気が付いたと考えられる。

4.2.6 味水御井神社の記述（キーワード数：100語）

ここでは52語（52%）の自然・地形に関する語が見られる。中でも「川」「水がきれい」などの水に関する語は23語（23%）となった。地形では味水御井神社の位置を把握したことで「高い位置に大学がある」という発見した学生もいた。水に関する語と同じ数の回答があった文化景観に関する語では、「趣がある」「落ち着く」といった語が見られた。図4をみると他のポイントではあまり多くない雰囲気描写をした学生が8名いることがわかり、神社の雰囲気に関心をもったと考えられる。映像の中にも出てきた水天宮と比較している学生も2名いた。同じ神社でも水天宮とは異なる傾向が表れたことが興味深い点である。

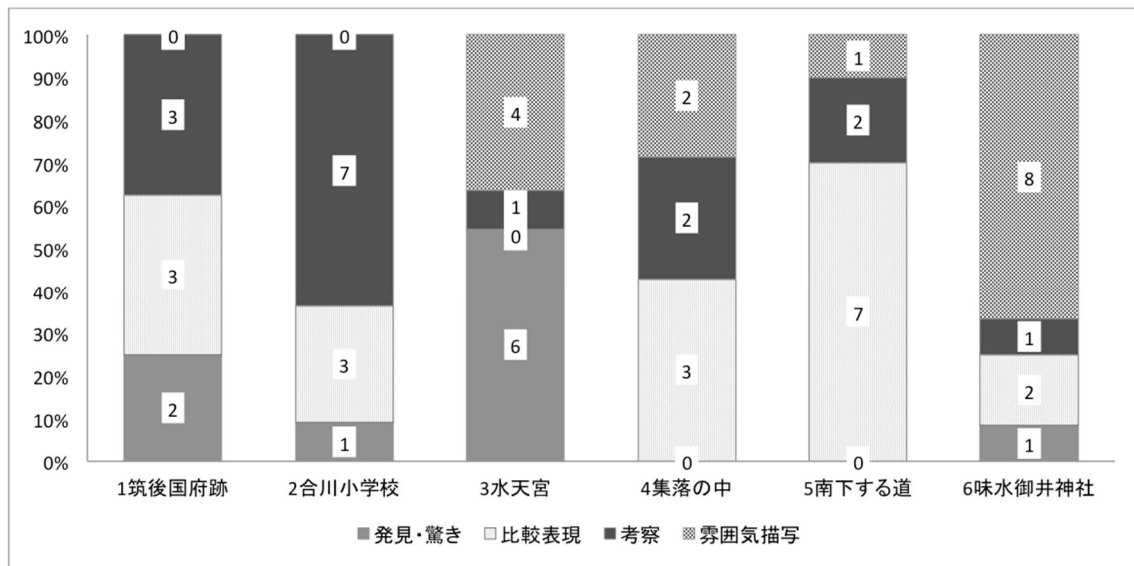


図 4 観察ポイント別 学生の反応 (アンケートにより筆者作成)

4.3 アンケートのまとめ

学生が地域のどのようなところに着目しているかを観察ポイント別に分析した。全体を通して多かったのは「道が狭い」ということだった。そして、映像の中に入れていたタイトルのキャプションが、アンケートで得られたキーワードに影響があるのではないかと考えられる結果となった。また、留学生にはこの調査は難しかったようである。何を意図している調査なのかが伝わっていなかったと思われる、留学生への配慮の必要を感じた。

図5はすべてのキーワードの分類別割合を示したものである。全てを通して最も多かったのは交通に関する語で、キーワード全体の29%であった。今回使用した映像のほとんどが道路沿いから撮影したものであることが大きく関係していると推測される。また、このような調査に慣れていないため、普段目にすることの多い道路や信号に着目したと考えられる。次に多かったのが自然・地形に関する語で27%であった。神社周辺の自然や、河川に着目していた。神社のあるポイントでは神社全体が森の中にあるという意味合いの「自然が豊か」という表現が数多く見られ、豊かな植生が学生の目を引く対象であることがわかった。生き物にも関心が集まっており、水天宮横の池の鯉についての記述が水天宮の記述のうち21%を占めていた。住宅が密集していることやアパートなど建物に関する記述は21%で、上位3つを合わせて77%を占める結果となった。全体的に普段目にすることの多い風景に着目していることがわかった。

また、アンケートをとった対象の中には情報社会学科の学生もいた。彼らは一度フィールドワークで歩いた上に解説も受けているため、いわゆる模範回答が得られた。感想では「一度も通ったことがない人にとっては、水に関係していることと結びつけるのは難しいと思う」というものがあり、学生にとっても映像によるフィールドワークに限界を感じたようである。他に情報社会学科の学生からは「映像では狭いところしかみえない」「BGMがほしかった」など、映像によるフィールドワークに対する指摘があった。

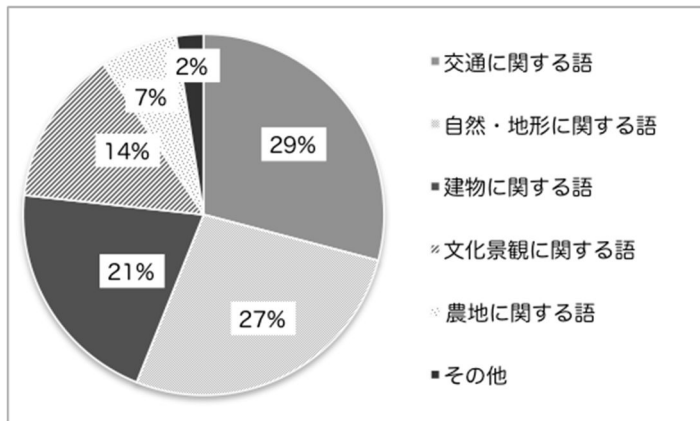


図 5 キーワード数の割合 (アンケートにより筆者作成)

この調査の感想で新たな発見や驚きがあったという内容の回答数が全体の 62%と高い割合を示している。映像によるフィールドワークが面白かったという回答は全体の 25%であったことを踏まえると、教室で映像を使用した学習が、学生の興味を引くと考えられる結果となった。

5. むすび

総合情報社会論のフィールドワークにおける問題点のひとつである、雨天中止となった時のフィールドワークの代替え授業に着目し、よりフィールドワークの雰囲気味わうためのフィールドワーク教材を制作する必要性を感じた。そこで写真よりも情報量の多い映像を使用することにした。映像教材を制作するにあたり、学生がどのような点に着目しているのかを把握することで、より学生の興味をひくものが制作できるのではないかと考えた。

本稿の目的は、悪天候時の代替え授業で使用するフィールドワーク映像教材を制作するために、学生が地域に対してどのような視点を持っているのかを明らかにすることである。そして学生が地理学的視点を持つきっかけとなる映像教材について考察することである。

あえて全く説明を入れていない映像を試作し、学生に視聴してもらいアンケート調査を実施した。映像を見せる前に「今から見せる映像に出てくる地域がどのような場所かを考えながら観察すること」ということだけ伝え、どのようなものに着目したかを自由記述で回答してもらった。アンケートに記述された文章からキーワードを抽出し、学生がどのようなところに注目するのかを分析した結果、以下のようなことが明らかとなった。

全てを通して最も多かったのは交通に関する語で、キーワード全体の 29%であった。今回使用した映像のほとんどが道路沿いから撮影したものであること、このような調査に慣れていないため、普段目にすることの多い道路や信号に着目したと考えられる。次に多かったのが自然・地形に関する語で 27%であった。神社周辺の自然や、河川に着目していた。住宅が密集していることやアパートなど建物に関する記述は 21%で、上位 3 つを合わせて 77%を占める結果となった。全体的に普段目にすることの多い風景に着目していることがわかった。

筑後国府跡の映像をみて「空き地」と感じた学生が 21 (17%) いた。国府とはどのような場所であったかということに加え、文化財の保護についても触れておくと良いと考えた。集落の中の映像をみて「なにも特徴がない、普通の所だと思った」という記述が見られたが、この学生の身近にある風景と類似していたからではないかと考察した。このことから、自分に身近な地域と他の地域を比較し相違点や類似点を考えることで、地域の位置付けができ、より深く知ることができるという地理学的な視点について言及しておく方が良いと考えられる。

映像によるフィールドワークに対して不満を感じている学生もいた。例えば「映像では狭いところしかみえない」「映像だけではわかりにくかった」「映像が速くて難しかった」「動画のほとんどが似た風景であったため特徴をとらえることが難しかった」という感想が全体の18%見られた。やはり映像によるフィールドワークには限界があることを再確認できる結果となった。しかし、身近な地域を改めて観察することで、今まで気がつかなかったことに気がついたという発見ができた学生もいた。例えば「普段は全く気にしていなかったけど、よく土地柄を観察してみると少しずつ違う点があるんだなと思いました」「改めて見るととてもおもしろかった」「久留米大学前駅近くの森が神社だったと初めて知りました」など、驚きや発見を記入していた学生は62%と高い割合を示す結果となった。中には「歩いてみたい」「寄り道したくなる」という学生もいたことから、映像によるフィールドワークが実際に足を運ぶきっかけとなる可能性があると考えられる。また、「こういうフィールドワークの仕方もありだと思った」「自分の知っている場所が出てくるとわくわくするし興味を持てる」という映像によるフィールドワークに好感のある回答が全体の25%であった。アンケートの分析と合わせて考察してみると、学生の興味を引くには身近な題材を選ぶことが重要であるということが明らかとなった。

映像によるフィールドワークは、地理学への興味を促すためのもので、あくまでも「代わり」である。やはりフィールドに出て自分たちの目で観察することが最も望ましい。代わりではあるが、いかに興味を持ってもらうかという点では効果があるのではないかと今回の調査で感じた。映像を観察している学生の顔を見ていると、普段の座学のときの表情とは違う雰囲気を感じ取ることができた。これからさらに改良を重ねる必要があるが、地理学への導入に映像を利用する価値は十分あると考えられる。また実際に講義を行う際には、写真の解説だけでなく専用のワークシートや地域の地形図を併用し、映像を見ながら作業を行うことでよりイメージをつけやすくしたいと考えているが、これは今後の課題としたい。将来的には学生たちの手で巡検番組を制作するという授業が実現できれば理想的である。撮影の計画、機材の扱い方、地域の方へのインタビューはもちろん、地域の歴史、地域の地形やその成り立ちを調べる必要があり、総合的な情報処理能力が培われ、情報社会学科らしい講義となるのではないかと考える。

謝辞

アンケート調査を実施するに当たり、地誌学Ⅱの貴重な授業時間を割いていただいた、堂前亮平名誉教授にはこの場を借りてお礼申し上げます。

参考文献

- [1] 斎藤功, “野外観察と記録” pp.115-145, 1988. 中村和郎・高橋伸夫, 地理学への招待, 古今書院, 1988.
- [2] 井手秀成・山下宗利, “フィールドワークが生徒に及ぼす影響—中学校社会科単元「身近な領域を調べよう」を事例に—” 佐賀大学文化教育学部研究論文集, 14 (1), 2009, pp.237-260, 2009.
- [3] 堂前亮平, “学生の地域調査実習に関わる教育実践” 久留米大学文学部紀要情報社会学科

- 編, 第3号, pp.13-24, 2007.
- [4] 堂前亮平 高木恵 篠倉大樹, “大学生に対する地域学習導入に関わる教育実践” 久留米大学文学部紀要情報社会学科編, 第6号, pp.57-68, 2010.
- [5] 篠倉大樹, “地理学野外実習における補助情報ページの試作” 久留米大学コンピュータジャーナル, Vol.27, 2012, pp.3-12, 2012.
- [6] 平野勇, ジオパーク 地質遺産の活用・オンサイトツーリズムによる地域づくり, オーム社, 2008.